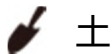


長く根付くことを願って

長く根付くことを願って、成長に大切な、土と水と栄養、花苗の植え方についての解説です。



土

良い土とは

植物が良く育つ良い土の条件とは、水や空気を良く通すことです。それでいて水や栄養分をよく保つという矛盾した条件を備えていなければなりません。

このような理想の土は、土の粒が集まって団子状になっています(団粒構造の土といいます)。土の粒がバラバラでは、すき間が小さくすぐ水びたしになるので、空気が入らず、根は呼吸ができません。

また良い土は、落ち葉などが分解された影響で、黒い色をしてふかふかしています。市内の山の斜面や丘陵には、積もった火山灰の表面にこのような土の層があり、果物の栽培などに利用されています。土が良くない場合は、耕して、腐葉土やたい肥を混ぜることが土壌改良の基本です。

用土(お店で売られている種類による分け方)

腐葉土

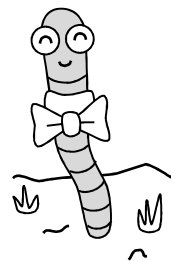
植物の落ち葉や枝が土中の生き物(ミミズや微生物など)によって分解されたものです(元の形が残っています)。栄養の基となり、また水を良く保ち、空気を良く通す働きがあります。園芸の必須材料です。

たい肥

稲わら・落ち葉・野菜くず・動物のふんなどが分解され、元の形が見えなくなっているものです。植物が育つための栄養となるほか、土中の生き物を増やし、水や空気を良く通すようにする働きがあります。

培養土

腐葉土・たい肥・肥料などを一定の割合で混ぜ合わせた土で、栄養バランスが良く、そのまま使えて便利です。植物の種類などによって求められる配合は異なり、バラ用や球根用など、用途に応じたものが売られています。



水やり

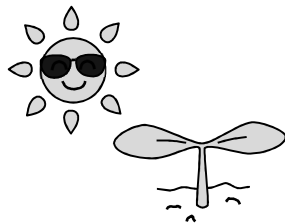
方法

鉢やプランターは、土の表面が乾いたら朝や夕方にとたっぷりに行なうのが基本です。土がいつも湿っていると中の酸素が減り、呼吸が妨げられたり「根腐れ」と呼ばれる症状になったりして良く育ちません。夏の暑い昼間に水やりをし過ぎる場合も、土の中が蒸し暑くなり、根が腐ってしまうので、注意します。庭は、夏に土が乾く場合のみで、基本的には大丈夫です。季節や植物の種類などによってしかたは様々です。

肥料

肥料の種類

肥料には、基本栄養補給のために種まきや苗を植え付ける前にほどこす「元肥」と、植物の生長している途中に栄養を追加する「追肥」があります。また、花や果実が実った後に、消耗して弱った状態の回復のために「お礼肥」をすることもあります。肥料は、多すぎると枯れてしまうことがあります。



コラム：水やりと肥料が必要な理由

植物は、太陽の光をエネルギーにして、根から吸上げた水と、空気中の二酸化炭素を材料に、「光合成」と呼ばれる、生きるのに必要な炭水化物と空気中の酸素をつくる働きをしています。また水は、体の表面から蒸発することで温度を調節したり、体の中で栄養分を運ぶのにも必要です。

植物の生育に必要な栄養分は、窒素、リン酸、カリウムなど、いろいろなものがあり、体をつくる材料や、体内での活力に使われます。これらの栄養分は、土に落ちて生命を終えた植物や動物などに含まれており、菌類などの生き物によって、水に溶けやすい植物が利用できる形に分解されます。栄養分として人がほどこすものを肥料といいます。

木や草がたくさん生え、鳥や昆虫などの動物がたくさんいる森などでは、何百年、何千年もかけて活きた土がつくられ、循環による植物が育つしくみができていますが、鉢やプランター、庭に新しくつくった花壇はそうではないため、水やりや肥料が必要になります。

もどごえ 元肥

油かす（植物の種から油をしぼった後のカス）やにわとりの糞、骨の粉など、植物や魚、動物、そのふんなどからつくった有機質肥料を使用します。有機質肥料の効果はすぐに出ませんが、ゆっくりと続きます。このような効き方をするものは、^{ちこうせいひりょう}遅効性肥料と呼ばれます。

ついで 追肥

速効性肥料と呼ばれる、すぐに効き目が出る、液体肥料（栄養分が溶けています）や化成肥料（鉱石などからつくられ、栄養をバランス良く含んでいます）を使用します。速効性肥料は効き目が長続きしないので、粒を大きくするなどして長く効くようにつくられた、^{かんこうせいひりょう}緩効性肥料も使われます。^{かんこうせいひりょう}緩効性肥料は、^{もどごえ}元肥としても使われます。

れいごえ お礼肥

液体肥料や化成肥料の速効性肥料を使用します。

花苗の上手な植え方

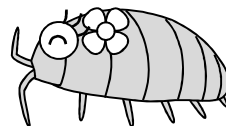
植えつける土は、あらかじめ20～35cmほど掘り起こし、柔らかくします。

植えるときはポットから苗を外し、ポットの土が飛び出ないように深く埋めます。

^{もどごえ}元肥は、根が直接触れないように、ポットの土より少し下の深さにまきます。

苗同士の間隔の目安は、20～25cmです。植えるときは間が広いように見えますが、成長すれば大丈夫です。

植えつけ後の最初の水やりは、たっぷり行います。その後は、月に1～2回を目安に^{かんこうせいひりょう}緩効性肥料などの^{ついで}追肥を、土の表面の株元から少し離れた位置にほどこします。

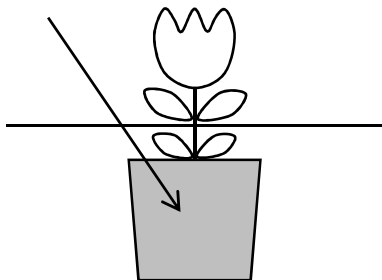


P4の図を参考に



良い

ビニールポットを
はずした苗の土

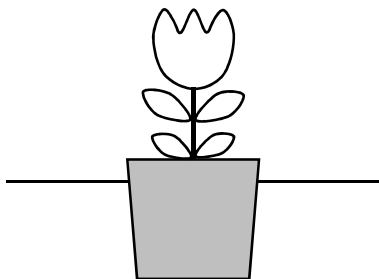


花壇や鉢、
プランターの土

ポットの土が見えないよう
に深く植えます。1番下の葉
は、埋まっても大丈夫です。



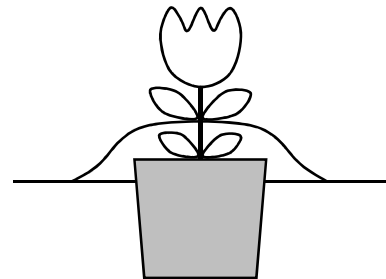
悪い



ポットの土が見えてしまっ
ていると、ポットの土と花壇
などの土の環境が違うため、
水が染み込まず、枯れてしま
います。



悪い



ポットの土が見えてしまっ
たので、花壇などの土を寄
せて隠すと、水をやる度に寄
せた土が流れてしまい、結
局、ポットの土は見えてしま
い、枯れてしまいます。